

I. WPI 検索結果より

DIALOG(R)File 352:Derwent WPI

(c) 2006 The Thomson Corporation. All rts. reserv.

0008925684

WPI ACC NO: 1998-476694/

XRAM Acc No: C1998-143909

Use of aspirin or its salt by application as powder to treat nasal polyp  
and oedematous lesion of nasal mucosa, at early stage

Patent Assignee: MEIJI MILK PROD CO LTD (MEIP); SASAKI Y (SASA-I)

Inventor: SASAKI Y

Patent Family (1 patents, 1 countries)

Patent

Application

Number	Kind	Date	Number	Kind	Date	Update
JP 10203988	A	19980804	JP 199712358	A	19970127	199841 B

Priority Applications (no., kind, date): JP 199712358 A 19970127

Patent Details

Number	Kind	Lan	Pg	Dwg	Filing Notes
JP 10203988	A	JA	3	0	

Alerting Abstract JP A

Use of aspirin or its salt (especially aspirin DL-lysine) to treat nasal  
polyp and oedematous lesion of nasal mucosa by applying to the lesion as a  
powder.

USE - The compound can be used to reduce or remove nasal polyp at an  
early stage.

Title Terms /Index Terms/Additional Words: ASPIRIN; SALT; APPLY; POWDER;  
TREAT; NASAL; POLYP; OEDEMA; LESION; MUCOUS; EARLY; STAGE

Class Codes

International Classification (Main): A61K-031/60

(Additional/Secondary): A61K-009/14

File Segment: CPI

DWPI Class: B05

Manual Codes (CPI/A-M): B10-C03; B12-M11G; B14-N04

(19) 日本国特許庁 (J P)

## (12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平10-203988

(43) 公開日 平成10年(1998) 8月4日

(51) Int. Cl. <sup>6</sup>

A61K 31/60

9/14

識別記号

ABM

F I

A61K 31/60

9/14

ABM

U

審査請求 未請求 請求項の数 2 O L (全3頁)

(21) 出願番号 特願平9-12358

(22) 出願日 平成9年(1997) 1月27日

(71) 出願人 000006138

明治乳業株式会社

東京都中央区京橋2丁目3番6号

(71) 出願人 597011577

佐々木 好久

東京都板橋区大山金井町53-2

(72) 発明者 佐々木 好久

東京都板橋区大山金井町53-2

(74) 代理人 弁理士 有賀 三幸 (外3名)

(54) 【発明の名称】 鼻茸および鼻粘膜の浮腫性病変の治療剤

(57) 【要約】

【解決手段】 アスピリン又はその塩を有効成分とし、該有効成分を患部に粉末状で付着せしめることにより用いられるものである鼻茸および鼻粘膜の浮腫性病変の治療剤。

【効果】 本発明の鼻茸および鼻粘膜の浮腫性病変の治療剤は鼻茸、特に浮腫性変化の段階や鼻茸形成の初期段階にあるものの患部に粉末状で付着させることにより高濃度に薬剤が作用し、優れた鼻茸縮小・消失効果を有する。

## 【特許請求の範囲】

【請求項 1】 アスピリン又はその塩を有効成分とし、該有効成分を患部に粉末状で付着させることにより用いられるものである鼻茸および鼻粘膜の浮腫性病変の治療剤。

【請求項 2】 有効成分が、アスピリン D L - リジン塩である請求項 1 記載の鼻茸および鼻粘膜の浮腫性病変の治療剤。

## 【発明の詳細な説明】

## 【 0 0 0 1 】

【発明の属する技術分野】本発明は、鼻茸および鼻粘膜の浮腫性病変の治療剤に関し、更に詳細には、患部に粉末状で付着させることにより、鼻茸又は鼻粘膜の浮腫性変化を縮小・消失させる鼻茸および鼻粘膜の浮腫性病変の治療剤に関する。

## 【 0 0 0 2 】

【従来の技術】鼻茸は、鼻・副鼻腔に生じる限局性浮腫性腫張であり、鼻漏、頭痛、嗅覚障害等の症状を示し、腫大すると、鼻閉塞を伴う疾病である。その原因としては、小乳頭状突起の腫瘍増大説、アレルギー説、細菌

説、ウィルス感染説等、種々の仮説が挙げられているものの、いまだ明らかとはなっていない。

【 0 0 0 3 】従来、鼻茸の治療においては、外科的除去が行われているが、再発するものが極めて多い。それ故、鼻茸の治療剤及びこれを用いた治療法の確立が望まれてきた。現在、ヒアルロニダーゼ、コンドロイチン硫酸、塩化リゾチーム等のムコ多糖体代謝酵素、ヘクロメタゾン等のステロイド系抗炎症剤及びこれらの併用等による患部に対する局所投与；インドメタシンの内服による全身投与等が行われている。しかし、これらの鼻茸治療剤は一部の患者には効果を示すが、患者によっては、症状が悪化することがある、副作用が強い、長期的には用量を増加していかなければならない、等の多くの欠点を有する。また、アスピリンまたその塩が鼻茸に有効であるという報告はなく、また、本剤を患部に粉末状で付着させて治療するという試みも行われていなかった。

## 【 0 0 0 4 】

【発明が解決しようとする課題】従って、本発明は、鼻茸に対し著効を示しかつ副作用のない鼻茸および鼻粘膜の浮腫性病変の治療剤を提供することにある。

## 【 0 0 0 5 】

【課題を解決するための手段】そこで本発明者は鋭意検討した結果、アスピリン又はその塩の粉末を患部に直接付着せしめることにより、高濃度に薬剤が作用し、鼻茸、中でも浮腫性変化の段階や、鼻茸形成の初期段階の腫張が顕著に縮小・消失することを見出し本発明を完成するに至った。

【 0 0 0 6 】すなわち、本発明は、アスピリン又はその塩を有効成分とし、該有効成分を患部に粉末状で付着させることにより用いられるものである鼻茸および鼻粘膜

の浮腫性病変の治療剤を提供するものである。

## 【 0 0 0 7 】

【発明の実施の形態】本発明の治療剤において、有効成分として用いられるアスピリン又はその塩としては、塩の形態のものが好ましく、具体的には、アスピリンと D L - リジン、アスピリンと D L - アルギニン等との塩が挙げられ、アスピリン D L - リジン塩が特に好ましい。このアスピリン D L - リジン塩は解熱、鎮痛等の目的で注射剤として用いられているものであり、安全性も確立されているものである。尚、本発明においてアスピリン又はその塩は、水和物又は錯体等の形態であってもよい。

【 0 0 0 8 】また、本発明において用いられるアスピリン又はその塩は、常法に従い合成したものをを用いてもよく、市販されているものをそのまま用いるか、常法に従い所望の塩の形態として用いてもよい。

【 0 0 0 9 】本発明治療剤は、粉末状の形態を有することが必要であり、ここで粉末とは日本薬局方規定のふるい 5 0 号 ( 3 0 0  $\mu$  m ) を全量通過するものをいい、患部への付着性及び付着のし易さ等の観点から 1 0 0 号 ( 1 5 0  $\mu$  m ) を全量通過するものが好ましく、更には 2 0 0 号 ( 7 5  $\mu$  m ) を全量通過するものが好ましい。

【 0 0 1 0 】更に本発明においては、本発明の効果を損なわない範囲において、通常用いられる薬学的に許容し得る担体を含有してもよい。

【 0 0 1 1 】かかる担体としては、アラビアゴム、カルメロースナトリウム、ステアリン酸、パルミチン酸及びその塩、でんぷん類、マイカ、タルク等の滑沢剤；ブドウ糖、でんぷん、デキストリン、デキストラン、セルロース等の糖類、グリシン、アラニン及び他のアミノ酸およびその塩、アルブミン、ゼラチン等の賦形剤及び安定化剤；アスパルテーム、ブドウ糖等の糖類、サッカリン等の甘味剤；カオリン、カルメロースナトリウム、無水ケイ酸、炭酸マグネシウム等の無機塩、活性炭等の吸着剤；グリチルレチン酸、エタノールアミン塩類等の粘膜・皮膚保護剤；ポリオキシエチレン、ポリオキシプロピレングリコール、大豆、卵黄レシチン、ポリソルベート等の界面活性剤等を挙げることが出来る。

【 0 0 1 2 】本発明の治療剤を患部に粉末状で付着させる方法としては、噴霧、吸入、塗布等の方法が挙げられる。

【 0 0 1 3 】本発明治療剤の投与回数及び投与量は特に制限されないが 1 日 2 ~ 3 回患部に付着させるのが好ましく、有効成分であるアスピリン又はその塩換算で 1 回あたり 1 0 ~ 1 0 0 0 mg が好ましく、 5 0 ~ 1 0 0 mg 程度が特に好ましい。なお、アスピリン過敏症を有する患者に対しては有効量の範囲内においてその症状に応じ投与量を減じて投与すればよい。

【 0 0 1 4 】本発明の治療剤の投与対象となる鼻茸は、その種類、症状、進行の度合等、特に制限されないが、

10

20

30

40

50

浮腫性変化の段階や鼻茸形成の初期段階にあるものに対し特に有効である。

【0015】

【発明の効果】本発明の治療剤は鼻茸、特に浮腫性変化の段階や鼻茸形成の初期段階にあるものの患部に粉末状で付着させることにより、優れた鼻茸縮小・消失効果を有する。

【0016】

【実施例】以下、実施例に従い本発明を更に詳細に説明するが、本発明はこれら実施例に何ら限定されるものではない。

【0017】実施例 1

各種のネブライザー、抗生物質、酵素剤及び消炎剤を使用し、効果が見られなかった鼻茸患者の両側鼻茸に綿棒を用いアスピリンDL-リジン塩粉末 100mg を週 2 回塗布した。治療開始 1 月後、目視で認識できる程度の鼻茸の縮小がみられ、鼻茸を摘出した。その後同様の処理

を行ったところ治療開始後 8 週間後においても鼻茸の再発はみられなかった。

【0018】実施例 2

副鼻腔炎及びこれに伴う鼻茸の再発歴があり、手術による摘出の後も再発がみられる鼻茸患者に対し噴霧器を用いアスピリンDL-リジン塩粉末 100mg を 1 日 2 回患部に噴霧した。治療開始 1 週間後、師骨洞天茸及び前頭洞入口部周辺、中耳介及び嗅裂周辺の浮腫製変化が消失し、膿性鼻漏、鼻閉、頭重等の鼻茸が原因とみられる症状が改善された。

【0019】実施例 3

副鼻腔炎に伴う中甲介及びその周辺の浮腫性変化を有する患者に実施例 2 と同様にしてアスピリンDL-リジン塩による噴霧療法を行ったところ、治療開始 1 週間後、中甲介の浮腫性変化が消失し、鼻漏、鼻閉等の鼻茸が原因とみられる症状が改善された。